

龍山里耶秦簡文字字形考Ⅲ

―筆路に見る草書字形との接点―

A Study on the Character Shapes of Longshan Live Qin Slips Ⅲ : Connection with Cursive Forms Seen in Brush Strokes

新井儀平

ARAI Ghei

里耶秦簡が出現した秦始皇帝時期は、周知の通り書体史的に言え

ば小篆に代表される時代であり、秦隸が通行した時代である。この

時期の簡牘に記された筆写体の肉筆文字資料「里耶秦簡」が公にな

ったのは、改ために記すまでもないがごく簡略に言えば『文物』

(二〇〇三・一)に所載の発掘簡報によつてである。その後の整理

が進み二〇一二年になつて専刊の大冊『里耶秦簡』が刊行され、当

時に注目を集めたことは記憶に新しい。簡牘三万六千枚の出土が報

告されているが、字数は一体どれほどになるのか。里耶秦簡につい

てはこれまで拙稿で度々述べてきたが、近年では●「秦始皇帝時期

に通行の草書文字」―里耶秦簡でわかつた新事実―(『大東書道

研究』二〇二〇)、●「秦始皇帝時期の草書文字Ⅱ」―里耶秦簡

に出現した〃草書化現象〃―(『大東書道研究』二〇二二)などで

稿を重ねてきた。

驚くべきことは、秦代のこの時期に、書体変遷の概念を大きく変

えるような新たな事実が里耶秦簡にはいくつも発生していることだ

ある。先の稿では極端に変容した「しんによう」の草書姿に着目、

里耶秦簡の広範にわたる〃草書化現象〃、隸書と草書の分岐を考え

られるようなことなどにも言及してきた。その続稿とでもいうべき

拙稿では、里耶秦簡に出現した「戈(ほこづくり)」およびそれに

関連した字形を取り上げ、後の草書字形との接点について考察を試

みたいと思う。

◆「戈」の字画に垂直縦画状の線、――発生

秦隸の里耶秦簡には、例えば「戊・戊」の二字だけでも不鮮明な

判読しにくい文字を含め一三〇字余りを数える。図1①はいわゆる秦隸だが、注目すべきは②の字形。右払いに相当する筆路がなんと直線になっていたり垂直に真下に引き下して縦線になっていたりするものが出現していることである。この特筆すべき筆路の文字は、まさにこの時期に初出を見るものである。僅かな事のようにだが、この事実は、後の草書字形の淵源を考究する上で見逃すことの出来ない出来事なのである。

里耶秦簡中で「戈(ほこづくり)」が書法的に関連する文字はこればかりでなく、先に記した字例を含め「戊・戌・成・戌・城・義・歳・錢・幾」など四〇字近くの語に及ぶ。同一文字でありながら一〇〇字をこえる字もあれば、一字だけという場合もあり使用頻度に差はあるが、字数の合計は非常に多く八〇〇字を優に越える。その中で字数は僅か一〇余字に過ぎないが先の字例に共通する垂直縦画状の筆路の文字を検出できるのである(図2①)。その②は、縦状の線が逆にそつているようにも見える。他に字例のない動きでこれについては項を改めて後述する。

ところでこのような垂直縦画状の筆路の文字がどうして発生したのか、何に起因するのか、考えられることが無いでもないが、当然それ以前の文字資料の調査が必要となる。しかし秦以前の戦国の肉筆文字資料は、その多くが円転の文字構造で里耶秦簡に発生したこ

の種の直線を含む文字との関係は見当たらない。あえて記せば斜画の釘状の線で知られる戦国初期の「曾侯乙墓竹簡」の文字ぐらいかと思うが、構造が異なり接点がない。視点を變えて考えると頭で浮かんでくるのが金文の字形である。文字の記載方法が異なる青銅器の金文と肉筆の筆写体の文字を同時に扱うことは平常では考えないが、近年の文字資料を扱う上では必ずしもそうとは言い切れないので、金文の字形にも目を通しておく。図3には「戊・成」字の金文を取り上げ、大略大別して①・②二種に分けて載せた。①の字形には「ほこづくり」に円状の筆路「」があるが、その②の字形は、①と異なり垂直縦画状の線「」を含む字形が存在しているのである。この①②二種の字形の相違は、本来的な相違であつて文字変遷に関わる違いとは考えにくい。それはそれとして里耶秦簡に出現した垂直縦画状の筆路の文字は金文②との関係があつたのかも知れない。

ところで時代が時代だけに小篆との関係はどうなのか。里耶秦簡が通行した秦代は、いわば小篆の時代。「ほこづくり」に関係する小篆の字形は図4の如くである。里耶秦簡に出現する「ほこづくり」と字画的に関係する文字は先に記したように八〇〇字を越え、その殆んどが小篆に通ずる字形であるが、注目のほんの僅かな字形だけは、小篆との接点を読みとれない。というより筆路的にまった

く関係がないと言った方がいいかと思う。

では、里耶秦簡と同時期の秦代の筆写体は、どうなのか。この時期の簡牘には、よく知られた「睡虎地秦墓竹簡」をはじめ、湖北省雲夢県龍崗村出土で文字の破損が著しい「龍崗秦簡」があり、湖南大学が香港で購入された「湖南大学岳麓書院藏秦簡」や、湖北省荊州市閔沮県周家台出土の「周家台秦簡」、そして甘肅省天水市の放馬灘で発見された「天水秦簡」などが知られている。この中でも里耶秦簡のような垂直縦画状の線を含む「ほこづくり」の事例は見当たらないが、それと近似して僅かな斜角を含む字形が「睡虎地秦墓竹簡」の〈法律答問〉と「龍崗秦簡」に散見する。図5、図6参照。里耶秦簡の「ほこづくり」に発生した垂直縦状の線は、今のところ他に例がないようだ。

ここで一度、典型的な草書字形を目に写し止めておこう。後に掲出の図17を参照。草書の「戈（ほこづくり）」は、右払的な筆路はなく、想像もつかないような縦画が中心的な字画になっていることである。里耶秦簡に出現したこの特筆すべき筆路の縦画は、実はこれを起点に草書字形へと変容していくことになるのである。

◆「戈」の字画に右回転の線、出現

前漢初期のよく知られた「馬王堆漢墓帛書」では、直線的な似た

ような筆路の文字に交って縦画が明確に右回転にしなり出した字形が出現する（図7）。この筆路の動きは、この時期に初出を見るものだが、その兆候がすでに里耶秦簡の頃にあったのではないかと言うことが考えられるのである。というのは先の図2②に載せたあのような筆路の文字が里耶秦簡に存在しているからである。それはそれとしてこのような書き方は、本来の「戈（ほこづくり）」の筆路から考えれば真逆の、書き方だ。だが直線からなら右回転に変化することは「↓」十分想像のつく事である。考えて見ればこの右回転は、多くの筆写体の円転のリズムに共通するものであり、この筆路の動きは当時の簡牘に広く及んでいるのである。

馬王堆漢墓帛書と比較的時期に近い「張家山漢簡」（二年律令）にも字例は極少だが同様の事が起っている（図8）。この簡は、一九八三年から一九八四年にかけて湖北省江陵県張家山の二四七号墓で出土した一、〇〇〇余枚の前漢の竹簡。同様の現象が、一九七三年から七五年にかけて江陵県鳳凰山十号前漢墓で出土した木牘にも発生している。六枚出土した木牘中に「錢」字が一六字書かれていて、その殆んどが図9に示した如く例の「ほこづくり」の書き方である。

また、一九七二～一九七三年に山東省臨沂市の銀雀山一号墓で出

土した「銀雀山漢墓竹簡」(孫臏兵法)にもいくつか共通するやりの字が見える(図10)。これらの右回転の「ほこづくり」には筆路的に草書への方向性が読みとれる。この右回転の動きは、実は先に記したように里耶秦簡にその初出があったということになるのである。

◆「戈」の筆路に新たな動き

前漢中期頃から円転縦画の動きに加えて下部では、筆路が左へ回転する動きが發生する。二〇〇四年、安徽省



天長市安樂鎮紀莊村の前漢墓で出土した「天長漢簡」の文字(図11)にそれを見ることが出来る。この動きは、草書字形を形成する上で大きな役割を示すことになる。恐らくこの頃あたりからこうした動きが始まっていたのではないかと考えられる。ちなみにこの文字は出土した三四片の木牘中の一枚に見られるものである。

図12に掲出した「城・誠」の文字は、「居延新簡」に見える字形で文字の中央が斜画二本の書き方に変化している。ちなみにこの簡は一九七二年から七六年にかけて甘肅省の額濟納(エチナ)河流域の甲渠候官で出土した木牘で、「居延新簡」と言われている二万枚に近い簡牘のことである。

図13は「敦煌漢簡」に見える草書字形である。その①②は、一九

七九年敦煌県西北の馬圈湾遺跡出土の簡牘の文字、③は、シャバンヌ本によるものである。文字の上部は、はや書きによって筆順・筆路が変わっていることがよくわかる。図14に掲出した「ほこづくり」を含む文字「賊・哉」の二字は、「尹湾漢簡」に見える草書字形。この簡は、一九九三年、江蘇省連雲港市東海県温泉鎮尹湾村の十余座の漢墓群の発掘調査に伴って出土した木簡。BC一〇年を上限とする墓葬と考えられている。図15に出した草書は、「長沙東牌樓簡」中に見える「誠」字で、二〇〇四年長沙市東牌樓の古井戸から発掘された木牘に書かれている文字。上部は筆順が(1↓2)変化している。図16は一九〇一年、スウェン・ヘディン樓蘭発見の残紙と木牘中に見える草書字形。①は四方がちぎれた小さな残紙に見え、②は木簡に書かれている文字である。

いずれにしても、こうした書き方の草書字形が比較的広い範囲で通行していたことが読みとれるのである。草書字形の理解しにくい「ほこづくり」の淵源が、里耶秦簡に発生した垂直縦画状の線にあったということを認めざるを得ないように思う。

図版の終りに、王羲之によって磨かれた草書字形の典型を掲出す(図17)。上の三字「成・城・城」は(上野本十七帖)と(遠近清和帖)に見える字形。その下の「成」は(旃闕帖)(パリ国立図書館蔵)に見える草書字形である。(『大英図書館収蔵 敦煌・樓蘭

古文書展』一九八三年、図録による）

里耶秦簡に発生した「戈（ほこづくり）」の文字を取り上げ、副題の如くその筆路と後の草書字形との接点について述べてきた。また、草書字形の「ほこづくり」（例「成」）がどうしてそのような形になったのか理解しにくい点があり、その淵源を探るべく考察を試みてきた。ここまでの事を整理すると以下の如くであり、簡略に記す。

●里耶秦簡の「ほこづくり」の文字に、注目すべき垂直縦画状の線

「」が出現。

●垂直縦画状の筆路は、金文の一部と接点があることは考えられるが、小篆との接点は皆無である。

●その特筆すべき筆路は、漢隸への方向とは別に、草書字形へ向う起点となった。

●次の段階で垂直縦画状の線が、右回転の動きに変化「」。後の草書の「ほこづくり」を形成する上で決定的な筆路となり、草書字形への道を歩むことになる。

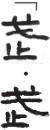
●ついで右回転縦画の下部では、左方向へ巻き上げる筆路「」が発生。「戊」字などでは、第一画の縦がL型に折れて（）筆順が変化、円転のリズムによって文

字の中ほどに斜画二本が生まれ、草書字形との接点が顕著となり、草書となる。

●草書の「戈（ほこづくり）」は、前漢に形つくられ、その兆しと考えられる

特筆すべき動きが里耶秦簡に出現した「ほこづくり」にあったことが考えられるのである。草書の淵源はそんな事になるかと思う。

◆「戈」のもう一つの変化について

以下「武」字について述べる。平常よく知られる字形は、見た目には「戈」（ほこづくり）を含む字形には見えないが、小篆の字形は「」（戈＋止）につくり、戈と止に従う字形である。ちなみに部首は「止」。隸書字形は「」などにつくるが、草書字形ではすっかり姿を変え「」になる。草書字形は一体全体どこがどうなっただろうか、なんとも理解しにくい。

この項では前述の変化とは異なるもう一つの「ほこづくり」の変化について書いておこうと思う。と同時に草書字形との関係について考察する。里耶秦簡に出現する「武」字は、不鮮明な文字を含め五〇余字を数える。その字形は、大別すると図18の如くで五種（①②③④⑤）になる。

その①は、篆書の字画が残存する字形である。②は、波勢を内蔵

するいわゆる秦隸の体。②のもう一つは左払いの斜画が横画に変わる。③は先の項で触れた字と共通して直線で長い斜角を含む字形。

上部はこれも横画状の二本に作る。この書き方は②以下の字の全てに共通する。④の字形は忽卒のはや書きで字画が崩れ出す。里耶秦簡では「武」字についてだけ言えばこの類の字が大半を占めている。

注目すべきは⑤の字形。下へ下へと移動する新たな動きが発生し、草書への方向性が顕著である。この字形の最大の特徴は、秦隸から離れ、垂直の短い縦画を含む類例のない「ほこづくり」が出現したことである。この形はこの時期に初出を見るものである。それに加えて筆路が草書のリズムに組み込まれているような書き易い字形になっていることである。里耶秦簡に出現したこの注目すべき字形⑤は、二字を検出できる。ちなみに「ほこづくり」に短い縦画を用いてこのように書くことは、「武」字以外に例がない。この形は「武」字本来の文字構造、つまり戈と止が上下関係にあることに起因するのではないかと考えられる。

里耶秦簡に発生したこの類の字がこれ以外に例があるのか気になるところである。「睡虎地秦墓竹簡」をはじめ今わかる限りの同時期の文字資料に目を通してみたが、見当たらない。たとえば里耶秦簡と時期的に近い「睡虎地秦墓竹簡」では、「武」字は十一字出てくるが、例の字形に該当するような字形は出てこない。少し前の戦

国の簡牘にも例の字形は見当たらない。ここで参考までに金文の字形に目を移しておこうと思う。

金文の字形は言うまでもなく種々様々だが、「戈」の第三画目の左払いの扱い方の相違によって分類すると図19の如く四種(①②③④)が考えられる。即ち①は、第三画目の斜画が短かい形。②はその斜画に左回転の曲りがある。③の字形は斜画が上部に移動し左下に長くのびる。④では、斜画がさらに上に移動し第一画の横画に近づき、上部の構造は①③とは異なり、角度のある横画状の二本の線が目立つ字形である。以上のように「武」字金文の字形は、第三画目の変化(位置と長短)によって形が異なるのである。この金文の④の字形は、里耶秦簡と照らし合わせてみると、簡牘の字形に影響を与えていたのかも知れない。

改めて里耶秦簡の字形を見てみよう(図18⑤)。その字形は、上部は横画二本で構成され、金文とは筆順が異なり、第一画に続けて第二画目が横画になる。新たな筆順による新たな字形の発生である(戈形ではなくギ形になる)。この頃から「武」字の上部はこの書き方が定着したと考えられる。ちなみに隸書字形では上部はその大部分が「ギ」のように横画二本に作る。この事は簡牘、漢碑に共通するだけでなく、ずっと後の楷書字形にまで及ぶ。

ところで里耶秦簡に出現した注目の字形図18・⑤は、それ以後の

変遷の過程が興味深いところであるが、「武」字の文字資料は意外に少ない。膨大な文字数を有する「馬王堆漢墓帛書」の場合でも「武」字は僅か一〇余字を検出するくらいで、里耶秦簡につながる字形は見当たらない。縦状の短い線を含む字形という点では図20に掲出したような字形を一字だけ見かけるものの下部は古い字形のままである。また「武」字が比較的多く出てくる「居延漢簡」「居延新簡」などの場合でも、「武」字についてだけ言へば隸書及びそれに属する字は比較的多いが、里耶秦簡の字形に通ずるような字形は見当たらない。中には文字の下部を省画で三角状の囲いに作った草隸的字形「**𠄎**」もあるので、その字形には注意しておく必要があるかと思う。

図21は、「敦煌漢簡」に見える草書に属する字形である。敦煌漢簡には「武」字はいくつも見え、「建武」の紀年のある簡には想像もつかない字形の文字がいくつも看取できる。縦画状の線が後の草書字形のように一字の中央に位置し、各々の字形に見える筆路が微妙に変化している様子が読みとれる。まるで一字一字が脱皮でもしているかのように字形が定まらない。

図22に掲出したのは、「長沙東牌樓後漢簡牘」に見える「武」字である。字画の簡略の度合いに初出を見る形である。この簡牘は、二〇〇四年四月～六月に、長沙市東牌樓の古井戸から発掘された簡

牘（四百二十六枚）で、有紀年簡がいくつも発見されていることなどから後漢靈帝頃と考えられている。省画が進み横画が一本とれた目新しい字形の出現である。判読しにくい字形であるが非常に興味深い字形である。というのは、縦画を引き下ろしそのまま筆を離なさず一筆書きすれば結果はどうなるか、その姿については説明を要しないだろう。

図23には、草書の典型とされる王羲之の草書を掲出する。

「武」字の草書字形は、中央に縦画を書き、中央でひとからげして書くという理解しにくい形に作られているが、それはと言えば「戈」の変則的な変化に起因するものである。その兆しと考えられる出来事、即ち縦画を含む「ほこづくり」の字形が早くも里耶秦簡中に出現していたという事実を指摘しておきたい。（参考までに里耶秦簡「賦」字に見る「武」の崩れる姿を出しておく）

以上、私の所見を書いてみた。甚だ気のきかぬことだが、専門家の方々のご叱正を賜りたい。

図1 里耶秦簡「戈」(ほこづくり)の文字

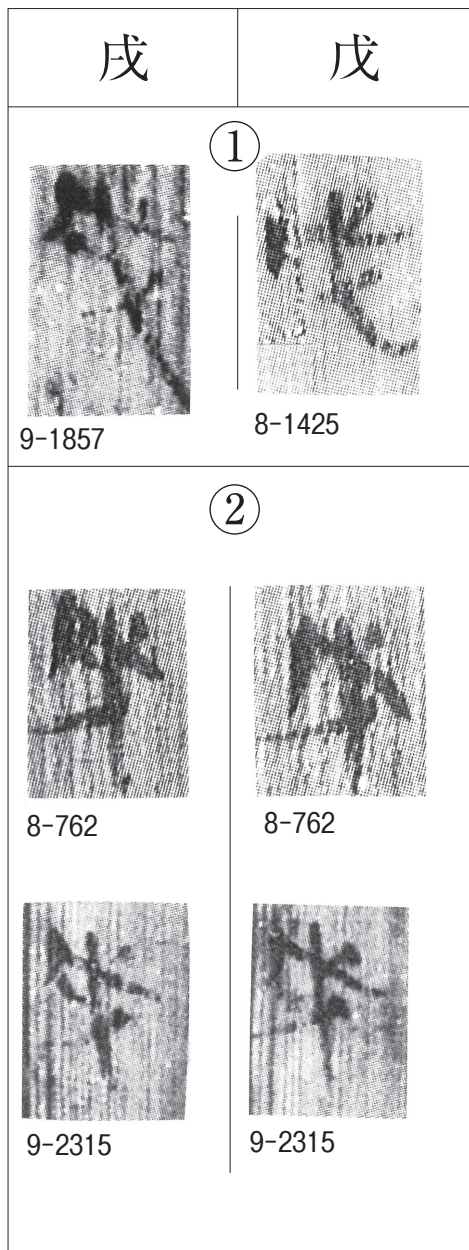


図2 里耶秦簡「戈」を含む文字いろいろ

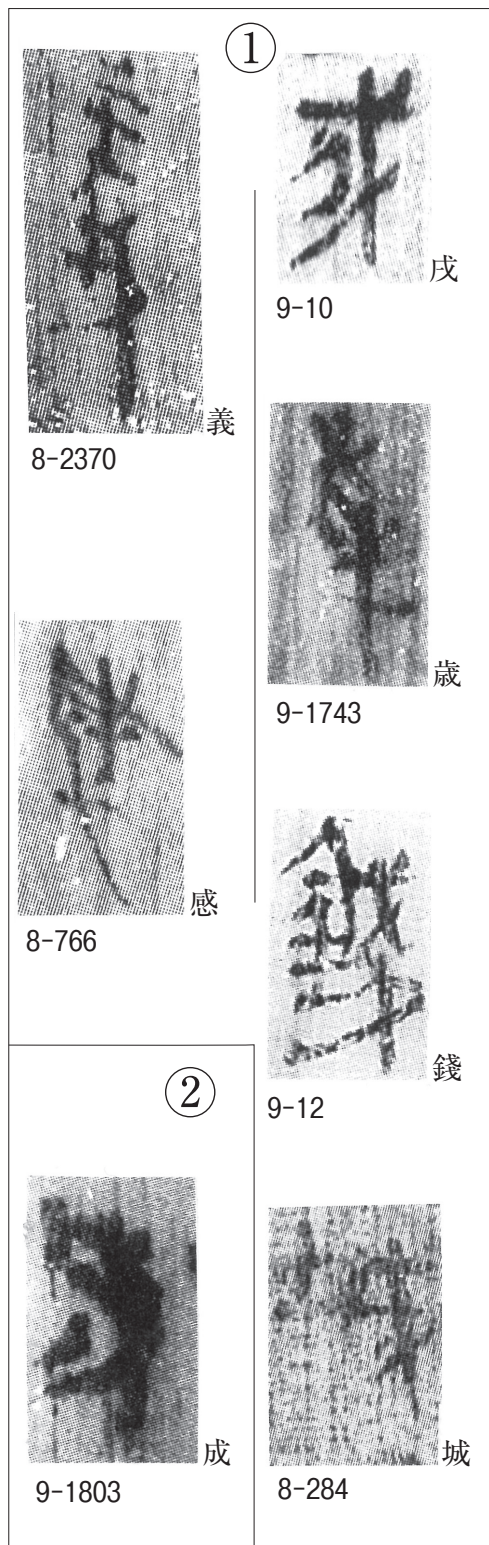


図3 金文「戈」(ほこづくり)

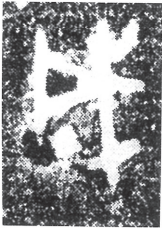
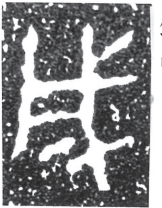
成		戊	
(B)	(A)	(B)	(A)
	豐尊		同殷
	成王鼎		聿父戊盤
	史頌殷蓋		畢蔑殷
	作冊翏卣		傅尊
	頌殷		光乍父戊卣
	師害殷		不契殷蓋
	作冊大鼎		衛乍父戊彝
	史頌殷		析子孫父戊卣

図4 小篆「戈」(ほこづくり)の文字

戈

戊

戌

成

図5 睡虎地秦墓竹簡

法律答問
戈

法律答問
城

法律答問
臧

日書・甲
義

図5 龍崗秦簡

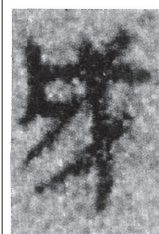
或

臧

城

錢

図7 馬王堆漢墓帛書



老子・甲本 成

L304



戦国縦横家書 城

L302



戦国縦横家書 誠

L208



春秋事語 威

L67

図8 張家山漢簡



二年律令 城

L68



二年律令 歲

L241



二年律令 臧

L55

図9 江陵鳳凰山漢墓土木牘



錢

図10 銀雀山漢簡



威

11-76



城

13-59

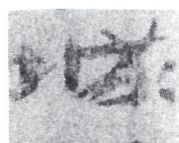
図11 天長漢簡



戌

M19:40-10-A

図12 居延新簡



城

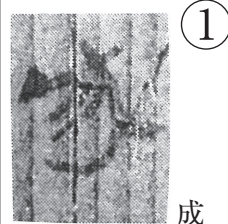
T65・316



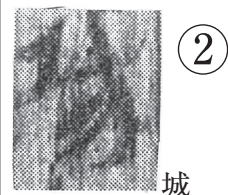
誠

T5・76-A

図13 敦煌漢簡



T5・35



T5・95

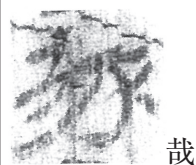


ch543

図14 尹湾漢簡

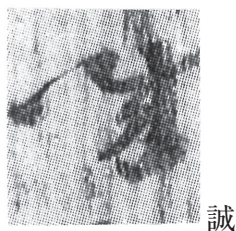


123



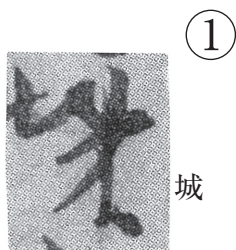
127

図15 長沙東牌樓簡牘

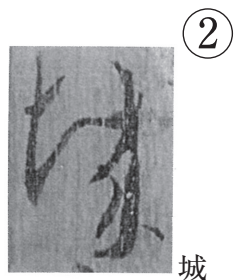


標本号1063

図16 スウエン・ヘディン樓蘭発見の残紙・木牘



コンラディ分類NO
C-1-27-2



C-2-44

図17 王羲之(草書の典型)



图18 里耶秦简

【武】

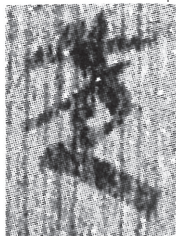
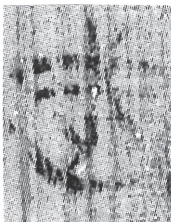
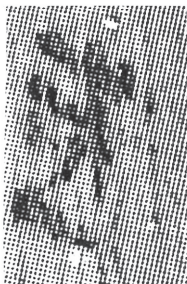
①  9-755	④  8-750
②  8-1206	 8-2324
③  8-1443	⑤  8-800  8-763

图19 金文

① 史牆盤 	③ 王孫遣者鐘 
散氏盤  猷鐘 	④ 癸鐘  秦公殷 
② 毛公鼎 	號季子白盤 

図20 馬王堆漢墓帛書

老子・乙本



37

図21 敦煌漢簡 シャパンヌ本

建武二十六年簡



ch564

建武三十一年簡



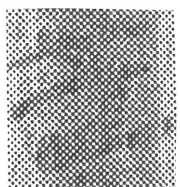
ch486

建武二十二年簡



ch484

建武十一年簡



ch562

図22 長沙東牌樓後漢簡牘



J7・1144

図23 王羲之

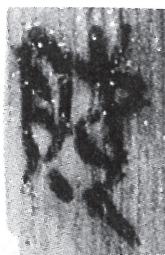
十七帖



遠宦帖



【附】参考資料 里耶秦簡中の「賦」字



9-1362